

# 日本の息吹

誇りある国づくりをめざすオピニオン誌

418

平成4年9月2日第3種郵便物認可  
令和4年9月1日発行  
(毎月1回1日発行)通巻第418号

月刊  
令和4年  
NIPPON  
NO  
IBUKI

9・10  
合併号

日本会議

## 安倍晋三元総理追悼号

# 大いなる器量の中の経綸 — 拉致問題と政治家

## 渡辺 利夫

拓殖大学顧問

平成14年9月17日、安倍晋三氏は小泉純一郎首相の訪朝に官房副長官として随行。この日、日朝平壤宣言が出され、それから1ヶ月経った同年10月15日、蓮池薫氏など5人の拉致被害者の帰国がなった。帰国といっても、家族を北朝鮮に残しての2週間ほどの一時帰国である。政界やマスコミの主流は、5人を北朝鮮にひとまず返し、波風を立てずに日朝国交正常化の方向へと動き出すべきだ、というものであった。

しかし、一人、安倍晋三氏の判断は違った。被害者を北に戻すのか否か、これは日本の国家意志のいかんを徹底的に問われるテーマである。被害者5人それぞれの意思としてではなく、「国家の意思」として、彼らを戻さない」と決断。この決断を小泉首相に伝え、首相の了承を得て政府の決定としたの

である。日本政府の方針が北朝鮮に伝えられ、平成16年4月5日には、すでに帰国していた被害者の子供を含む8名の新たな帰国がなった。安倍氏には、じりじりと日を待つような1年半だったのであろう。

拉致問題の帳を開いたことこそが、その後、党、政府の要職のほとんどに就き、ついには総理大臣として憲政史上最長政権の記録を更新した政治家、安倍晋三氏を誕生させる重要な契機となった。安倍晋三氏の不退転の意志、不撓不屈の精神、それにもかかわらず人々に寄せる安倍氏の眼の優しさ、そうしてみずからを誇ることにないあの謙虚な立ち居振る舞い。安倍氏が稀代の権力者であったことは紛れもないが、ただ力だけであれほどの政治的成果を残し得たとは思われない。大いなる器量の中の経綸だったというべきか。